

麻酔説明書・同意書

【無痛分娩とは】

無痛分娩は麻酔を用いて陣痛の痛みを和らげる分娩法です。

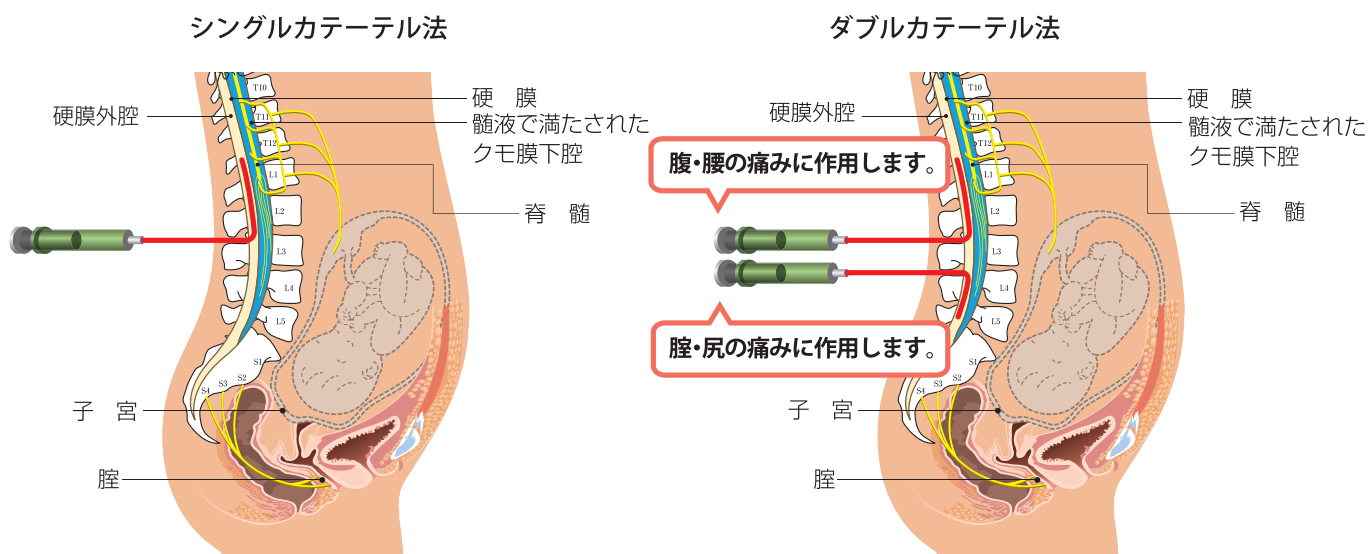
当院では主に硬膜外麻酔と呼ばれる麻酔法を用いています。

また分娩が急速に進行していて硬膜外麻酔では間に合わない時には、脊椎くも膜下麻酔を行うこともあります。

【硬膜外麻酔】

当院での無痛分娩のほとんどがこの方法です。

背骨の中の硬膜外腔と呼ばれるスペースに細いチューブを入れて、そこから麻酔薬を注入します。



【硬膜外無痛分娩の麻酔に関連した随伴症・合併症】

(1) 発生頻度が高いもの

微弱陣痛、分娩遷延：麻酔薬の影響で陣痛が弱くなり分娩の進行が遅れることがあります。

これに対して陣痛促進剤を使用しなければならなくなったり、吸引娩出術(赤ちゃんの頭にカップを装着して引っ張る)が必要になることがあります。

(2) 時々発生するもの

①**発熱：**無痛分娩を開始して6時間以上が経過すると38℃以上の熱が出る場合があります。

この現象は直接赤ちゃんに悪影響を与えるものではありませんが、熱を下げるために解熱剤を使用したり点滴を追加することがあります。

②**片側効き、まだら効き、効果不十分：**麻酔薬が入っているのに、どうしても一定の部分の痛みだけ軽くなることがあります。その際には麻酔チューブを少し引き抜いて調整しますが、それでもなお効果が不十分の時には麻酔チューブの入れ直しが必要になることがあります。

③**腰痛、背部痛：**多くの場合は麻酔の針を刺した事による影響で、時間の経過とともに良くなります。ただ(極めてまれな現象ですが)足がしびれたり、足に力が入りくいなどの症状を伴う時には職員にお知らせ下さい。

④**血圧低下：**軽く血圧が下がることは時々ありますが、硬膜外麻酔において母体や赤ちゃんに悪影響を及ぼすことはまれです。

(3) 頻度は低いものの過去に発生したことがあるもの

①頭痛：麻酔針で硬膜が傷つくことによるものです。

大半のケースでは1～2週間で自然に良くなります。

発生頻度は1～2%とされていますが、当院の無痛分娩で強い頭痛が発生したケースは非常に少なく、過去4例にとどまっています。

②神経障害：分娩後に足のしびれや感覚麻痺が残ることがあります。その原因のほとんどは分娩中の特殊な姿勢や赤ちゃんの頭による神経圧迫です。麻酔が原因となることは極めてまれです。

これらの症状は通常数週間から数ヶ月で自然に良くなります。

③排尿障害：分娩後に尿が出にくくなったり、全く出なくなったりすることがあります。

これは分娩中に赤ちゃんの頭が母体の膀胱関連神経を圧迫したことによるものです。

無痛分娩で分娩の進行が遅くなり、神経が圧迫される時間が長くなると排尿障害の発生率が上がりますので、速やかな分娩が望まれます。この点からも過度な麻酔薬使用とそれに伴う分娩の遅れは避けるべきとされています。排尿障害の際には、数日間から1週間膀胱に管を入れて膀胱を休めます。

(4) 極めてまれで当院では発生したことがないものの、可能性がゼロではないもの

①感染：麻酔チューブの入っている経路を通じて神経に菌が感染することがあるとされていますが、発生率は0.0002～0.0015%です。

②血腫：麻酔チューブの入っている場所付近に血液の塊ができると、これが神経を圧迫して麻痺などの症状が出る場合があります。無痛分娩の麻酔で発生することは極めてまれで、0.0002～0.0005%とされています。

③局所麻酔薬中毒：麻酔チューブが誤って血管内に入ってしまうことがあります。

血管内にチューブが入り込んでしまう現象は2.8～10%に発生するとされていて、気付かずに麻酔薬を注入すれば生命に関わる重大な副作用が起きることがあります。

大事なのは早期発見です。当院では麻酔薬に少量のアドレナリンを含ませ、チューブが血管内に入っていないことを確認しながら無痛分娩を進めています。

また解毒作用がある薬剤も常備しています。

この対策により、これまで麻酔薬中毒が発生した無痛分娩ケースはありません。

④全脊椎麻酔：麻酔チューブが誤って『くも膜下腔』と呼ばれる部分に入ってしまったことで麻酔の広がりが上半身にまで及び、呼吸困難になることがあります。0.02～0.04%に発生するとされています。

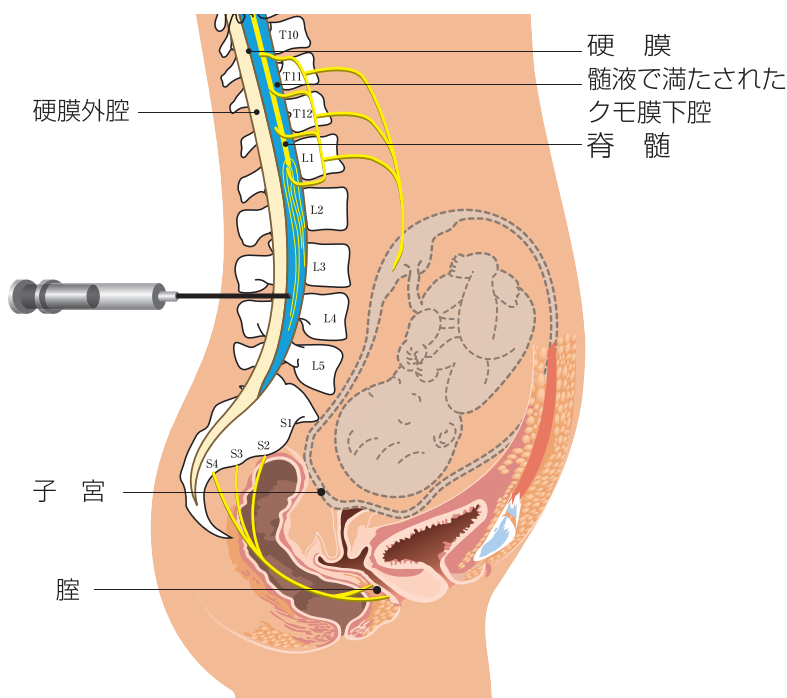
当院ではこれを予防するために、麻酔チューブ挿入時に確認を行い、さらに適宜麻酔範囲の確認作業を繰り返しています。

【脊椎くも膜下麻酔】

背骨の中の狭い腔(くも膜下腔)に細い針を入れて、そこから麻酔薬を注入します。早急に麻酔効果が必要な際に行いますが、1～1.5時間ほどで麻酔効果は薄れます。当院で無痛分娩のためにこの麻酔を用いるのは年間5件前後です。この麻酔では、①血圧低下、②数日間続く頭痛、③胎児徐脈発生による緊急帝王切開、などの合併症が発生することがあると言われています。

当院では問題となるような事例は過去に発生していませんが、これは対応ケースが少ないことによるのかもしれませんが。急速な麻酔効果を希望なさる場合には脊椎くも膜下麻酔を行いますが、上記合併症が発生しうることをご理解下さい。また脊椎くも膜下麻酔では硬膜外麻酔と同様の合併症が起こることもあります。

脊椎麻酔（クモ膜下注入）



【費用】

当院の無痛分娩では追加費用は発生せず、自然分娩と同じ費用です。しかし分娩後の痛み止めとして継続使用される場合には、初日8000円、2日目5000円、3日目5000円の追加費用が発生します。もっとも、実際に分娩後も硬膜外麻酔を使用される方はまれです。

_____年____月____日

医療法人聖粒会 慈恵病院 医師氏名 _____

私は、今回の麻酔の必要性とその内容、これに伴う危険性等について説明を受け、理解しましたので、その実施に同意します。なお、実施中に麻酔方法の変更や緊急に処置を行う必要が生じた場合には、適宜処置されることについても同意します。

_____年____月____日

患者氏名 _____ 親族氏名 _____